牧会書簡における神とキリストの関係[1]

樂　満　大　樹

1．問題の所在

「牧会書簡」において、「神」や「キリスト」という呼称はよく見受けられる[2]。この書簡群の中で「神」と「キリスト」の関係性はどのように捉えられていたのであろうか。本論考によって、1 世紀末から 2 世紀初めのキリスト教におけるパウロ主義の実態について明らかにできる部分があると思われる[3]。牧会書簡における「神」と「キリスト」の関係性について、該当の箇所の釈義的考察を通して明らかにしていきたい。

考察対象の箇所は、(1)「[神] と [キリスト] の区別」として テトス 2.13、(2)「義と救いの担い手としての [神]」として テトス 3.7、(3)「[神] と [キリスト] の修飾語」として 1 テモテ 1.1, 2, 12, 17 ; 2.3, 5 ; 4.10 ; 6.3, 13, 14 ; 2 テモテ 1.1, 2, 10 ; 4.1；テトス 1.1, 3, 4 ; 2.10, 13 ; 3.4, 6 とする。これらの箇所には、牧会書簡における「神」と「キリスト」の関係性が他の箇所と比べ、より具体的に現れている可能性が高いため、今回の考察対象とした。

まず、いくつかの先行研究に関して検討したい。

H. Marshall は、テトス 2.13 の τῆς δόξης τοῦ μεγάλου θεοῦ καὶ σωτῆρος ἡμῶν Ἰησοῦ Χριστοῦ を「私たちの、大いなる神であり救済者であるイエス・キリストの栄光」と

1　本論文は、2021 年 6 月 7 日にオンライン上で開催された第 62 回西日本新約聖書学会における研究発表を基に、その場で得た批判とその後に頂いた助言を受けて加筆、修正したものである。特に、辻学氏と須藤伊知郎氏にはいくつもの重要な指摘をいただいた。深く感謝する。

2　「神」に関しては、1 テモテ 1.1, 2, 4, 11, 17 ; 2.3, 5 ; 3.5, 15 ; 4.3, 4, 5, 10 ; 5.4, 5, 21 ; 6.1, 11, 13, 17 ; 2 テモテ 1.1, 2, 3, 6, 7, 8 ; 2.9, 14, 15, 19, 25 ; 3.17 ; 4.1 ; テトス 1.1, 2, 3, 4, 7, 16 ; 2.5, 10, 11, 13 ; 3.4, 8 の計 48 回。「キリスト」に関しては、1 テモテ 1.1, 2, 12, 14, 15, 16 ; 2.5 ; 3.13 ; 4.6 ; 5.11, 21 ; 6.3, 13, 14 ; 2 テモテ 1.1, 2, 9, 10, 13 ; 2.1, 3, 8, 10 ; 3.12, 15 ; 4.1 ; テトス 1.1, 4 ; 2.13 ; 3.6 の計 32 回。

3　「牧会書簡」の執筆時期に関しては議論がある。牧会書簡を真正パウロ書簡の一部と考える学者（G. Knight ; W. Mounce ; P. Towner ; D. ガスリー、T. オーデンなど）もいるが、紀元後 90 年代以前には見受けられない語彙が現れていることや、2 世紀初めに没したと考えられるイグナティオスが牧会書簡を知っている可能性が高い（詳細な議論は A. Merz 2004. *Die fiktive Selbstauslegung des Paulus*.［NTOA 52］Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 179-187 参照）などの理由から、1 世紀末から 2 世紀初め頃の成立だと考えるのが良いであろう。辻学 2003「牧会書簡　テモテへの手紙一、二、テトスへの手紙」（大貫隆ほか監修『新版　総説　新約聖書』315-340 頁）日本キリスト教団出版局　327 頁および辻 2013『偽名書簡の謎を解く　パウロなき後のキリスト教』新教出版社　189-191 頁参照。

解釈し、この箇所において「神」と「キリスト」を同一の存在として捉えている[4]。「キリスト」を「神」と捉える考え方は、ほぼ同時期に書かれたヨハネ 1.1、ヘブライ 1.8-9、2 ペトロ 1.1、1 ヨハネ 5.20 などにも見受けられる。このため、我々の箇所においても「キリスト」を「神」と同一に捉えている可能性は、教理発展の過程上、否定はできない[5]。ただしこの箇所を「大いなる神と、私たちの救済者であるイエス・キリストの、栄光」として解釈し、「神」と「キリスト」を別の存在として捉える解釈者も多く[6]、議論が続いている。

また、牧会書簡において「救済者」という呼称が「神」と「キリスト」の両方に用いられている。J. Fitzmyer は、この「救済者」としての「キリスト」を「神の救済行為の代理人」として捉える[7]。よって、Fitzmyer は「神」と「キリスト」が牧会書簡の中で区別され、「救い」という枠組みにおいて「キリスト」を「神」の「代理人」であると考えている。

J. Sumney は、1 テモテ 6.14-15 において「キリスト」を「神の救いの現れを通した神の顕現者」として捉える[8]。「神」と「キリスト」を「救い」という枠組みの中で捉えている点は Fitzmyer と同じであるが、Sumney はこの箇所において「キリスト」を「神の顕現者」として考えている。「キリスト」が「神の顕現者」であると考えるものの、「神」と「キリスト」の区別に関し、「キリスト」が 6.11-16 において「神」に従属する者として現れていることは「少なくとも正しい」とする[9]。従って Sumney は、「神」と「キリスト」が別の存在として扱われていると考える。

以上のように、牧会書簡における「神」と「キリスト」の関係性をどのように捉えるかについて、意見が分かれている。

牧会書簡において「神」と「キリスト」が同一の存在として考えられているのか、あるいは別の存在として捉えられているのかに関しひとつの答えを出すことは、議論が続いている現状において大変重要であると思われる。また「神」と「キリスト」が

4　H. Marshall 2004[2]. *The Pastoral Epistles*.（ICC）London : T&T Clark, 279-282. 同じ意見の解釈者も含めて、この箇所に関する詳細な考察は後述参照。

5　辻 2019「新約釈義　テトス書 7」（『福音と世界』2019 年 10 月号、72-79 頁）73 頁、注 22。辻 2021「イエス・キリスト＝神？」（浅野淳博ほか『ここが変わった！「聖書協会共同訳」新約編』日本キリスト教団出版局、106-109 頁）107 頁も併せて参照。

6　L. Oberlinner 1996. *Die Pastoralbriefe*.（HtKNT XI 2/3）Breisgau : Verlag Herder Freiburg, 137 ; H. Merkel 1991. *Die Pastoralbriefe*.（NTD 9/1）Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 99 など。詳しくは後述参照。辻 2019, 73 頁も、「やはり神とキリストは別の存在を指していると見る方が良いであろう」と結論付けている。

7　J. Fitzmyer 2002. The savior God : the Pastoral Epistles（A. Das / F. Matera［ed.］, *The Forgotten God : Perspectives in Biblical Theology, FS P.J. Achtemeier.* Louisville/London : John Knox, 181-196）, 194.

8　J. Sumney 1999.“God our Savior”：The fundamental operational theological assertion of 1 Timothy（*Horizons in Biblical Theology,*［3］21,2, 105 -123）, 112.

9　Ibid.

別の存在として考えられている場合、両者の関係性を考察することは、1 世紀末から 2 世紀初めのパウロ主義の実態を明らかにする上でも非常に大きな貢献となるであろう。

2. 本文の検討

(1)「神」と「キリスト」の区別

テトス 2.13

［神の恵みは］大いなる神と、私たちの救済者であるイエス・キリストの、栄光の顕現という幸いな希望を受け入れるようにし（私訳）、

προσδεχόμενοι τὴν μακαρίαν ἐλπίδα καὶ ἐπιφάνειαν τῆς δόξης τοῦ μεγάλου θεοῦ καὶ σωτῆρος ἡμῶν Ἰησοῦ Χριστοῦ[10],

11 節から 14 節にわたる文全体の主語は 11 節の「神の恵み」であり、13 節の προσδεχόμενοι で始まる分詞構文は直前の 12 節の ζήσωμεν の主語である「私たち」を説明するものであるが、問題となるのは「大いなる神と私たちの救済者であるイエス・キリストの栄光の顕現」の部分の解釈である。「栄光の」にかかる属格句（τῆς δόξης τοῦ μεγάλου θεοῦ καὶ σωτῆρος ἡμῶν Ἰησοῦ Χριστοῦ）の解釈の仕方に議論があり、主な立場は以下の 3 つに分けられる[11]。

1)「大いなる神と、私たちの救済者であるイエス・キリストの、栄光の」[12]

2)「私たちの、大いなる神であり救済者であるイエス・キリストの栄光の」[13]

3)「大いなる神の栄光という意味での私たちの救済者であるイエス・キリストの」[14]

まず、3）は最も蓋然性が低く、真っ先に退けられるであろう。このように読むこ

10　以下、ギリシア語本文は E. Nestle/ K. Aland（ed.）2012[28]. *Novum Testamentum Graece.* Stuttgart : Deutsche Bibelgesellschaft による。

11　以下は、辻 2019, 74 頁に依った。また、Oberlinner 1996, 136-137、および Marshall 2004, 276-282 参照。

12　Oberlinner 1996, 137 ; Merkel 1991, 99 ; J. エレミアス 1975（泉治典ほか訳）「テモテへの手紙　テトスへの手紙」（『NTD 新約聖書註解　9』NTD 新約聖書註解刊行会、1-154 頁）47 頁、田川訳など。

13　Marshall 2004, 279-282 ; J. Quinn 1990. *The Letter to Titus*.（AB）New York : Doubleday, 155-156 ; P. Towner, 2006. *The Letter to Timothy and Titus*.（NICNT）Grand Rapids : Eerdmans, 247-248；土屋博 1990『牧会書簡』日本キリスト教団出版局　148-149 頁、D. ガスリー 2014（村井優人訳）『テモテへの手紙、テトスへの手紙』（ティンデル聖書注解）いのちのことば社　250-251 頁、新改訳 2017、フランシスコ会訳（2012 年版）、新共同訳、聖書協会共同訳（ただし別訳で 1 も掲載）などがこの立場。

14　岩波訳など。詳しくは、辻 2019, 74 頁、注 17 参照。

とは構文として難しいと思われる[15]。また新約聖書中に「神の似姿である、キリストの栄光」（ἡ δόξα τοῦ Χριστοῦ, ὅς ἐστιν εἰκὼν τοῦ θεοῦ, 2 コリント 4.4）や「（キリストは）栄光の反映」（ἀπαύγασμα τῆς δόξης, ヘブライ 1.3）などの表現が見受けられるが、これらの箇所においてもキリストが神の「栄光」と完全に同一のものとされているわけではない[16]。よって、この可能性は考えられないであろう。

2）に有利な根拠は、σωτῆρος に冠詞が付いていないことである。ただし辻学が指摘しているように、1 テモテ 5.21 において Χριστός の前に冠詞がない用例（τοῦ θεοῦ καὶ Χριστοῦ Ἰησοῦ καὶ τῶν ἐκλεκτῶν ἀγγέλων）も見受けられるため[17]、σωτῆρος に冠詞が付いていないことで 2）の可能性がすぐさま高まるとは言えない。また、11 節の θεός は「キリスト」を意味しているのではなく「（父なる）神」を指しているため、同じ文脈の中で θεός がそれぞれ「神」や「キリスト」を表しているとするのは困難だと思われる[18]。また、続く 14 節においてキリストが自らを身代金として与えたことが語られており、神とキリストの同一性を前提とするならば、神が自らを身代金として与えたことになり、文脈に不整合が生じてしまう。よって 2）の可能性は考えにくいであろう。

1）の可能性としては、牧会書簡において「神」と「キリスト」を並列させている箇所が複数見受けられる[19] ため、このことが大きな根拠となるであろう。すなわち、上述した 1 テモテ 5.21 や 6.13、あるいは 2 テモテ 4.1 において、「神」と「キリスト」が並列されており、両者は区別されているように思われる[20]。これらの箇所において「神」と「キリスト」が区別されているのにも拘らず、我々の箇所において「神」と「キリスト」が同一に見做されているとすることは、説得力に欠ける主張となるのではないであろうか[21]。

15　この読み方を採る場合、δόξα と Χριστός が離れており、間に δόξα に付属する修飾句が存在することになるため、かなり複雑な構文となる。これを自然な読みとすることは少々困難に思われる。辻 2019, 74 頁も参照。

16　2 コリント 4.4 において「キリスト」は「神の似姿」としか言われていないし、ヘブライ 1.3 で「キリスト」は少なくとも「（神の）栄光」の「反映」としか考えられていない。いずれの箇所においても、キリストが神の「栄光」と完全に同一のものとは見做されていない。辻 2019, 74 頁に賛成。

17　辻 2019, 73-74 頁に賛成。注 19（74 頁）と 20（73 頁）も参照。また、1 テモテ 6.13 においても同様に Χριστός の前に冠詞がないため（ἐνώπιον τοῦ θεοῦ τοῦ ζῳογονοῦντος τὰ πάντα καὶ Χριστοῦ Ἰησοῦ τοῦ μαρτυρήσαντος ἐπὶ Ποντίου Πιλάτου τὴν καλὴν ὁμολογίαν）、このような事象は牧会書簡において必ずしも珍しいことではないと言える。

18　辻 2019, 73 頁に賛成。

19　1 テモテ 1.1, 2 ; 2.5 ; 5.21 ; 6.13 ; 2 テモテ 1.2 ; 4.1；テトス 1.4, 3.6。

20　1 テモテ 5.21「神とキリスト・イエスと選ばれた天使たちの前で」（ἐνώπιον τοῦ θεοῦ καὶ Χριστοῦ Ἰησοῦ καὶ τῶν ἐκλεκτῶν ἀγγέλων）、6.13「すべての命を生み出す神とポンティウス・ピラトゥスへ良い告白を証言したキリスト・イエスの前で」（ἐνώπιον τοῦ θεοῦ τοῦ ζῳογονοῦντος τὰ πάντα καὶ Χριστοῦ Ἰησοῦ τοῦ μαρτυρήσαντος ἐπὶ Ποντίου Πιλάτου τὴν καλὴν ὁμολογίαν）、2 テモテ 4.1「神と、生きている者たちと死んでいる者たちを裁くであろうキリスト・イエスの前で」（ἐνώπιον τοῦ θεοῦ καὶ Χριστοῦ Ἰησοῦ τοῦ μέλλοντος κρίνειν ζῶντας καὶ νεκρούς）。Merkel 1991, 100 参照。

21　辻 2019, 73 頁も参照。

以上の考察から、テトス 2.13 は「大いなる神と、私たちの救済者であるイエス・キリストの、栄光」と訳すべきであり、ここで著者は「神」と「キリスト」を明確に区別していると考えられる。

(2) 義と救いの担い手としての「神」

テトス 3.7

すなわち、あの方の恵みによって私たちが義とされ、永遠の命の希望に従って相続人となるためである（私訳）。

ἵνα δικαιωθέντες τῇ ἐκείνου χάριτι κληρονόμοι γενηθῶμεν κατ᾽ ἐλπίδα ζωῆς αἰωνίου.

ここで「恵み」に付された「あの方（ἐκεῖνος）」をどのように解釈すべきかに関し、議論がある。多くの解釈者は、直前の 6 節の「イエス・キリスト」を指すと考えている[22]。一方で、この箇所が 3 節からの文脈の中にあるため、特に 5 節以降で示されている「神」という主語[23] がこの箇所の主語にもなっており、ここで示されているのは「神」であると考えることも可能である[24]。その場合、この箇所がローマ 3.24 に基づいていると思われること[25]、そしてその箇所では「神の恵み」がテーマとされていること[26] も、ひとつの根拠となるであろう。

では一体、我々の箇所において、著者は「誰」の恵みを念頭に置いていたのであろうか。ここで、よく用いられる指示代名詞 οὗτος ではなくἐκεῖνος が使用されていることを考えたい。ἐκεῖνος は οὗτος よりも新約聖書中で見受けられる回数がはるかに少なく、牧会書簡内でも多く用いられてはいない[27]。また、名詞と結合したἐκεῖνος は

---

22 N. Brox 1989[5]. *Die Pastoral Briefe*.（RNT）Regensburg : Verlag Friedrich Pustet, 309 ; Towner 2006, 787；土屋 1990, 145 頁；T. オーデン 1996（岩橋常久訳）『テモテへの手紙　1、2　テトスへの手紙』（現代聖書注解）日本キリスト教団出版局　77 頁、新共同訳、新改訳 2017、フランシスコ会訳（2012 年版）、聖書協会共同訳、田川訳など。

23 実際のところ、該当の動詞（ἔσωσεν : 5 節、ἐξέχεεν ; 6 節）が示す主語は「彼」だが、これらが示すものは前後の文脈から「神」だと分かる。また 5-6 節が参照していると思われるヨエル 3.1 において、霊を注ぐのは「神」である。

24 Quinn 1990, 226 ; Oberlinner 1996, 177；岩波訳など。

25 ローマ 3.24「彼の恵みにより無償で、イエス・キリストにおける贖いを通して義とされる」（δικαιούμενοι δωρεὰν τῇ αὐτοῦ χάριτι διὰ τῆς ἀπολυτρώσεως τῆς ἐν Χριστῷ Ἰησοῦ·）。この箇所においても、「恵みによる義認」が示されている。この「恵みによる義認」というテーマに関してローマ 3.24 とテトス 3.7 で示されている内容は非常に似ているため、牧会書簡の著者がローマ 3.24 を想起しながらテトス 3.7 を執筆した可能性は高い。辻 2020「新約釈義　テトス書　10」（『福音と世界』2020 年 1 月号、72-79 頁）74 頁参照。

26 実際のところ「彼の恵み」となるが、前節の 23 節との繋がりから、示されているものは「神の恵み」であることが分かる。よって、ローマ 3.24 においては、「神の恵みによる義認」が言われていることになる。辻 2020, 74 頁、および注 23 に賛成。

27 新約聖書内で、οὗτος は 1387 回見受けられるが、ἐκεῖνος は 265 回しか用いられていない。また牧会書簡では、οὗτος が 32 回使用されているが、ἐκεῖνος は 8 回のみ（1 テモテには無し；2 テモテ 1.12, 18 ; 2.12, 13, 26 ; 3.9 ; 4.8；テトス 3.7）である。テトス書では 3.7 にしか用いられていないため、著者が↗

遠く離れた人物や事物、あるいは既に言及された人物や事物を指すことが一般的であるため[28]、直前のものというよりも離れた部分にある既出の内容を指している可能性がある。すなわち、3 節以降の文脈に現れる「神」という主語をこの箇所のἐκεῖνος が示していると考えられる。よって我々の箇所における「あの方の恵み」は、「神の恵み」を表していると言えるであろう[29]。

以上の考察から、この箇所の「あの方の恵み」は「神の恵み」を示しているのだと考えられる。「神の恵み」によって我々が義とされ、「神の恵み」が我々を「永遠の命の希望に従って相続人」とするのである。この点で著者が「神」を義の担い手、且つ我々を永遠の命へと至らせる救いの担い手として捉えている可能性は高い。

(3)「神」と「キリスト」の修飾語

1 テモテ 1.1, 2, 12, 17 ; 2.3, 5 ; 4.10 ; 6.3, 13, 14 ; 2 テモテ 1.1, 2, 10 ; 4.1；テトス 1.1, 3, 4 ; 2.10, 13 ; 3.4, 6

牧会書簡の中で、θεός および Χριστός という単語は数多く見受けられるが、それぞれの言葉に修飾する語が付されている場合もある。

θεός に付されている言葉には、「救済者（σωτήρ）」（1 テモテ 1.1 ; 2.3 ; 4.10；テトス 1.3 ; 2.10 ; 3.4）、「父（πατήρ）」（1 テモテ 1.2 ; 2 テモテ 1.2；テトス 1.4）[30]、「唯一（μόνος / εἷς）」（1 テモテ 1.17 ἀφθάρτῳ ἀοράτῳ μόνῳ θεῷ ἄφθαρτος ἀόρατος μόνος θεός「不滅で見えず唯一の神」；2.5 Εἷς θεός「ひとりの神」）、「不滅」（1.17；上述）、「永遠の王（βασιλεὺς τῶν αἰώνων）」（1 テモテ 1.17）、「すべての命を生み出す（ὁ ζῳογονῶν τὰ πάντα）」（1 テモテ 6.13）などがある[31]。

他方 Χριστός には「救済者」（2 テモテ 1.10；テトス 1.4 ; 2.13 ; 3.6）、「主

↘ この箇所でἐκεῖνος を使用していることは、検討すべき問題であろう。

28 H. Balz “ἐκεῖνος”（G. シュナイダーほか 1993『新約聖書　ギリシア語釈義事典』I、教文館、467-468 頁）467-468 頁。同じ牧会書簡における用例の中で、2 テモテ 3.9「彼らも（同様にそう）だった」の中の「彼ら」は、前後の文脈上、8 節の「ヤンネースとヤンブレース」を示していることは明らかである。この 3.9 の用例から、牧会書簡においても他にἐκεῖνος が直前ではなく離れた事物を指している可能性は十分に考えられる。

29 Marshall 2004, 323 n.83 は、ἐκεῖνος が「誰」を指すかについて「著者は、はっきりと考えを持っていないのかもしれない」と述べている。辻 2020, 74 頁もその可能性を否定していない。しかし Marshall は根拠を示していないため、この可能性を論証することは困難に思われる。

30 ただし、「父」が Χριστός に付されることはない。θεός に「父」が付されている箇所には、いずれも「神」と「キリスト」が並列されている。その際、1 テモテ 1.2 と 2 テモテ 1.2 では「私たちの主」、テトス 1.4 では「私たちの救済者」が「キリスト」を修飾している。このことから著者は「父」を、「主」あるいは「救済者」である「キリスト」とは完全に分けているように考えられる。著者にとって「父」は、「神」に特有の属性として理解されていたのであろう。

31 他に、テトス 1.2「偽らない神（ὁ ἀψευδὴς θεός）」、2.13「大いなる神（ὁ μέγας θεός）」という用例が見受けられる。

（κύριος）」（1 テモテ 1.2, 12 ; 6.3, 14 ; 2 テモテ 1.2）、「希望（ἐλπίς）」（1 テモテ 1.1）、「神と人間の仲介者であり人である…（μεσίτης θεοῦ καὶ ἀνθρώπων, ἄνθρωπος）」（1 テモテ 2.5）などが付されている[32]。

この中で重要なのは、θεός にも Χριστός にも「救済者」[33] という呼称を付している用例が複数見受けられることである。このことは、著者が「神」にも「キリスト」にも、「救済者」としての属性を考えていた、という点で見落とすことができないであろう[34]。

では、牧会書簡において「救済者」とはどのようなものとして考えられていたのであろうか。また、「神」と「キリスト」に付された「救済者」はそれぞれ同じ意味を表しているのであろうか。まず、牧会書簡における「救済者」は「栄光の顕現（ἐπιφάνεια τῆς δόξης）」（テトス 2.13）の姿[35] であり、我々が労苦し闘う理由はこの者に「希望を委ねている（ἐλπίζω）」（1 テモテ 4.10）から、という。

この「救済者」が「神」に付された用例の一つとして、牧会書簡内の「パウロ」が「救済者」である「神」によって「信託されて（ἐπιστεύθην）」いる（テトス 1.3）[36] ことが挙げられる。また、「私たちの救済者である神の深情と人間愛（χρηστότης καὶ ἡ φιλανθρωπία ἐπεφάνη τοῦ σωτῆρος ἡμῶν θεοῦ）」（テトス 3.4）が現され、神は我々を「彼（神）の憐れみによって、聖霊に属する再生成と刷新の洗いを通して救った（τὸ αὐτοῦ ἔλεος ἔσωσεν ἡμᾶς διὰ λουτροῦ παλιγγενεσίας καὶ ἀνακαινώσεως πνεύματος

32　他に、1 テモテ 6.13「ポンティウス・ピラトゥスへ良い告白を証言したキリスト・イエス」、2 テモテ 4.1「生きている者たちと死んでいる者たちを裁いているキリスト・イエス」という用例がある。

33　σωτήρ を「神」に対して用いている用例は、新約聖書以外の文献においても見受けられる。エステル記補遺 D.2；フィロン『アブラハムの移住について』124；『ギリシア碑文集成』4930 b ; Aelius Aristides, *In Sarapin* 20, II 358 など。詳しくは、M. ディベリウス／H. コンツェルマン 2011（山口雅弘訳）『牧会書簡注解』教文館、222-232 頁参照。「救済者（σωτήρ）」という呼称は、ギリシア・ヘレニズム世界において馴染みのものであった。W. Foerster/G. Fohrer 1964. “σωτήρ”（G. Kittel/G. Friedrich［ed.］, *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament* VII. Stuttgart : Verlag W. Kohlhammer, 1004-1022）1005-1012 によれば、この呼称はギリシアの神々（例、ポセイドン、ゼウスなど）に対して用いられ（1006）、市民を救った者や闘技場で命をかけた者といった人間に対しても使用されていた（1006-1008）。その後ヘレニズム世界における支配者崇拝のための呼称として用いられていたため（1009-1012）、σωτήρ はギリシア・ヘレニズム世界において一般的な用語として存在していた。

34　F. ヤング 2000（土屋博ほか訳）『牧会書簡の神学』（叢書　新約聖書神学　11）新教出版社　65 頁は、牧会書簡において「救済者」という呼称が「神」から「イエス」へ移っていると言うが、それぞれの箇所において文脈上「神」から「キリスト・イエス」へと「救済者」の呼称が移っているようには思われない。むしろ、同じ文脈において「救済者」である「神」と「キリスト・イエス」という存在が並列されているようにも考えられる。よって、ヤングの指摘は説得力に欠ける。ただしヤング（61 頁）が指摘しているように、「救済者」としての「神」という用例が新約聖書中のほとんどで牧会書簡内に見受けられることは、一つの特徴的な傾向であると思われる。むしろこのことは、著者により「神」と「キリスト」の両者が「救済者」として考えられたという、新約聖書の中における特殊な状況を物語る根拠となっているのではないであろうか。

35　新約聖書内における δόξα は、神の「威信」、「権威」、「栄誉」、「威光」を表している。H. Hegermann “δόξα”（G. シュナイダーほか 1993『新約聖書　ギリシア語釈義事典』I、教文館、397-401 頁）397 頁参照。

36　同じような用例として、上述の 1 テモテ 4.10 も挙げられる。

ἁγίου)」(3.5)という用例もある。この「聖霊」は神が「私たちの救済者であるイエス・キリストを通して私たちの上へ豊かに注いだ(ἐξέχεεν ἐφ' ἡμᾶς πλουσίως διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ τοῦ σωτῆρος ἡμῶν)」のである。また、我々は前述のテトス 3.7 において、「神の恵み」が私たちを「永遠の命の希望に従って相続人」とすることを見た。その上で我々は、著者が「神」を義の担い手、且つ私たちを永遠の命へと至らせる救いの担い手として捉えている可能性が高いことを確認した[37]。これらの用例から、「神」に付された「救済者」は、我々を生かす「創造主」という「大いなる」(テトス 2.13)存在として示されており、我々を救う存在として表されていることは間違いないと言える。

他方で「救済者」である「キリスト」は、2 テモテ 1.10 にあるように「死を無効化し、福音によって不滅の命を明らかにした(καταργήσαντος μὲν τὸν θάνατον φωτίσαντος δὲ ζωὴν καὶ ἀφθαρσίαν διὰ τοῦ εὐαγγελίου)」存在として表されている。このことから、著者は「救済者」である「キリスト」にも、「永遠の命へと至らせる救いの担い手」のような「神」と同じ「救済者」としての機能を考えているように思われる。ただし、このことで「神」と「キリスト」が同一の存在として捉えられているのではなく、「キリスト」には「神と人間の仲介者[38]」(1 テモテ 2.5)として、「救済者」としての機能を「仲介」する役割が考えられていたのである[39]。

この σωτήρ という呼称は、ギリシア・ヘレニズム世界においてローマ皇帝やギリシアの神々に対しても用いられていた[40]。辻の主張するように、「ギリシア・ヘレニズム世界において、神的存在や人間に対して用いられていた馴染みの表現を、(中略)キリスト教の神に当てはめ、その救済の普遍性(I テモテ 4 : 10「すべての人間の救済者」)を強調しようとした宣教的な意図」[41] によって σωτήρ が牧会書簡内に持ち込まれ、キリスト教的な絵枠組みの中で用いられたのであると考えられる。従って「救済者」という呼称は牧会書簡独自のものではなく、ギリシア・ヘレニズム世界の一般的な用語が「キリスト教化」された結果のあらわれなのである[42]。

我々はこの節の初めに、θεός および Χριστός に付された修飾語を見てきた。「神」

---

37 前述、「2. 本文の検討(2)義と救いの担い手としての[神]」参照。

38 「仲介者」に関して、M. Gill 2008. *Jesus as Mediator : Politics and Polemic in 1 Timothy 2 : 1-7.* Bern : Peter Lang, 111-131 ; 155-162 参照。

39 Fitzmyer 2002, 188-190, 194、辻 2021「新約釈義 第二テモテ書 20」(『福音と世界』2021 年 11 月号、72-79 頁)72-73 頁も併せて参照。

40 本稿、注 33、および辻 2021, 73-74 頁参照。ギリシアの神々に対する用例に関しては、ディベリウス/コンツェルマン 2011, 227 頁参照。

41 辻 2021, 73 頁。

42 O. H. Maier 2013. The Pastoral Epistles ; Practices of Empire(*Picturing Paul in Empire ; imperial image, text and persuasion in Colossians, Ephesians and the Pastoral Epistles.* London : T&T Clark, Kindle 229-297)288 も、σωτήρ を含めた牧会書簡内で見受けられる言葉や概念の中には、ギリシア・ヘレニズム世界に存在する既存のものをキリスト教的なものへと新しく変えられたものがあると指摘する。

には「唯一」（1 テモテ 1.17 ; 2.5）や「不滅」（1.17）などが付され、「すべての命を生み出す神」（6.13）という文言も見受けられた。一方で「キリスト」には、「主」（1 テモテ 1.2 ; 6.3 ; 2 テモテ 1.2 など）や「希望」（1 テモテ 1.1）、「神と人間の仲介者であり人である…」（1 テモテ 2.5）等が付されていた。これらは、先ほど我々が見てきたような「神」と「キリスト」のそれぞれに付された「救済者」の意味合いに近い部分があるように思われる。すなわち、「神」は大いなる「創造主」として我々を「救いへと至らせる」「唯一」であり「不滅」の存在として、「キリスト」は「仲介者」として神と人間を仲介し、我々を「救いへと導く」「希望」の存在として表されているのである。

3. 結論

牧会書簡における「神」と「キリスト」の関係性について、我々はいくつかの箇所を通して釈義的に考察してきた。その上で、以下の 2 つを結論として述べることができるであろう。

（1）牧会書簡において、「神」と「キリスト」は明確に存在が分けられている[43]。その上で、「神」には我々を救いへと至らせる大いなる「創造主」としての属性、「キリスト」には神と人間を仲介し我々を救いへと導く「仲介者」（1 テモテ 2.5）としての属性が考えられている。

（2）著者は両者に同じ「救済者（σωτήρ）」という属性を当てはめているが、この場合も両者によってその含意された意味合いは異なり、「神」には「創造主」として、「キリスト」には「（神と人間の）仲介者」としての σωτήρ を考えているように思われる。「救済者（σωτήρ）」という同じ称号を「神」と「キリスト」の両方に用いていることは、他の新約文書内には見受けられない、牧会書簡の特徴と言える[44]。

このような提示の仕方を取ることで、著者は「神」と「キリスト」の属性を明確に分け、牧会書簡が相手にした「異なる教え」（1 テモテ 1.3 ; 6.3）との闘いの際、「健

43　牧会書簡とほぼ同じ時期に成立したヨハネ 1.1, 18 ; 20.28；ヘブライ 1.8-9 ; 2 ペトロ 1.1 ; 1 ヨハネ 5.20 では、「神」と「キリスト」は同一の存在として考えられている。この点で、牧会書簡における「神」と「キリスト」の関係性は、同時代の新約文書内に見受けられる捉え方とは異なる。このことは牧会書簡の特徴と言えるであろう。

44　σωτήρ は新約聖書中に 24 回見受けられるが、この称号が「神」に付されているのは 8 箇所（ルカ 1.47 ; 1 テモテ 1.1 ; 2.3 ; 4.10；テトス 1.3 ; 2.10 ; 3.4；ユダ 25）のみであり、牧会書簡を除いた新約聖書中のほとんどの箇所で「キリスト」に付されていることが分かる。よって、牧会書簡において「神」と「キリスト」の両方に「救済者（σωτήρ）」の称号を適用させていることは、牧会書簡の特徴と言えるであろう。

全な教え」（1 テモテ 1.10 ; 2 テモテ 4.3；テトス 1.9 ; 2.1）や「健全な言葉」（1 テモテ 6.3 ; 2 テモテ 1.13 テトス 2.8）を持つ著者の教会としての明確な立場を示し、「異なる教え」との闘いにおいて「パウロ」の教えを「正しく」継承した「正統的パウロ主義」[45] として生き残る策を講じていたのではないかと思われる。牧会書簡における「神」と「キリスト」の関係性は、「正統的パウロ主義」を巡る闘いの一つの証拠となり得るであろう[46]。

45 「正統的パウロ主義」に関しては、辻 2003, 338-340 頁、また辻 2013, 171-177 頁および 180-182 頁参照。

46 以上の結論から、「正統的」ではない「異なる教え」を持つ人々は、「神」と「キリスト」を同一視していた可能性が高いと思われる。そのため、著者は「正統主義」として、「神」と「キリスト」が別の存在であることを牧会書簡内で主張したのであると考えられる。

【ABSTRACT】

The Relationship between God and Christ in the Pastoral Epistles

RAKUMAN Daiki

The terms “God” and “Christ” are common in Pastoral Epistles. It is important to consider whether “God” and “Christ” are used separately, and whether the two terms are used to refer to the same “God”, in order to clarify the reality of “Paulism” in the early second century, when the Pastoral Epistles were established.

Tit. 2.13 is a very useful passage to see if the author was making a distinction between “God” and “Christ”. We can conclude from this passage that “God” and “Christ” are depicted as distinct.

In Tit. 3.7, we consider who “that man” (ἐκεῖνος) refers to, and thus who makes us heirs of eternal life. We conclude that the principle represented by ἐκεῖνος is “God”.

Finally, we consider the qualifiers attached to “God” and “Christ”. We notice that the designation “savior (σωτήρ)” is attached to both. We think that the term “savior” is used in “Christ” as an intermediary for the saving function of God. Thus, although “God” and “Christ” are distinguished, a common role in the saving function is considered for both.

The relationship between “God” and “Christ” in Pastoral Epistles is the result of the author’s thinking in the struggle for “orthodox” Paulism.